

自己関連づけ効果と個人特性に関する探索的研究

瀬川真帆¹・月元 敬²

(¹岐阜大学大学院教育学研究科・²岐阜大学教育学部)

An exploratory research of the self-reference effect and individual traits

Maho SEGAWA (*Graduate School of Education, Gifu University*) and Takashi TSUKIMOTO (*Gifu University*)

本研究では、自己関連づけ効果と個人特性（自意識、シャイネス、自己像の不安定性）との関連を明らかにすることを目的とした。実験の結果、本研究では明瞭な自己関連づけ効果の生起自体が認められなかった。しかし、その制約はあるものの、自己関連づけ得点と各尺度との関連を検討した結果、自意識とシャイネスは自己関連づけ効果との関連が認められなかったが、自己像の不安定性と自己関連づけ効果との関連が認められた。自己像が不安定な人は、自己を模索あるいは自己概念を再吟味しており、自己像が安定している人よりも自己の認知構造が多くあると考えられている。この点に基づくと、本研究の結果は、自己像が不安定であるほど、与えられた情報に対する自己関連づけが多様な認知次元で行われ、精緻化されることを示唆している。

Key words：自己関連づけ効果 (self-reference effect), 自意識 (self consciousness), シャイネス (shyness), 自己像の不安定性 (instability of self-image)

うつ病を認知の側面から捉えようとするアプローチにBeck (1976 大野訳 1990) の認知療法がある。認知療法は、苦痛を生み出すのは起こった出来事ではなく、その出来事を自分がどう解釈するかに依存する、すなわち、うつ病は記憶などの認知メカニズムの働きの産物であると捉える臨床心理学的立場である。例えば、Mathews & MacLeod (1994) は、抑うつではネガティブな自己関連情報の顕在記憶 (explicit memory) が高まっていることを示した。これは過去の失敗などを反芻的に考え続けることにより、容易に想起できるほどその記憶強度が高まったためだと考えられる。このように、抑うつ発生の一端には、記憶を始めとする認知特性が関与しているといえる。

自分に関連することほど記憶に残りやすいことは一般的によく知られた事実である。「記銘時に自己に関連づけた処理を行うと、意味的な処理や他者に関連した処理を行った場合と比較して記憶保持が優れる」という記憶現象を自己関連づけ効果 (self-reference effect) と呼ぶ (堀内, 1995)。例えば、記銘情報に対して、感情価を判断したり (中尾・宮谷, 2003), 生存リスク状況を想像したり (Cunningham, Van den Bos, Gill, & Turk, 2013) することによって、自己関連づけ効果が生じることが示されている。このように感情や生命危機は、守る対象としての自己を意識させやすくする条件の例であり、記銘情報は強く自己と結びつけられることによって強い記憶痕跡を形成すると考えられる。

嫌な経験に関する記憶は、できることなら早く忘れ去りたいと思うはずである。しかし、その出来事を自己に強く関連づけやすい人ほど、本人の思いとは裏腹にその記憶は強くなると考えられる。また、たとえ1回1回が短くても、嫌な記憶を何度も繰り返し思い出していれば、それ自体が記憶検索の強化として働くかもしれない (cf. Cull, Shaughnessy, & Zechmeister, 1996)。特に、抑うつと関連があるとされる個人特性が自己関連づけ効果に与える影響を明らかにすることは、記憶を媒介とした抑うつ理解に貢献すると考えられる。そこで本研究では、自己関連づけ効果と個人特性の関連を明らかにすることを目的とする。

堀内 (2008) によると、自己関連づけ効果の説明として、自己に当てはまるか否かという処理によっ

て記銘材料の体制化が促進されるという解釈や、自伝的記憶の想起によって精緻化が促進されるという解釈など、いくつかの理論的解釈がなされている。その一つに自己の認知次元に注目したのがある。人が自分自身の性格特性に関わる判断をする時には、自分に関する知識や過去の体験を参照して判断を行っていると考えられる。その際、重要な役割を果たすのが自己の認知構造である(堀内, 1996)。例えばMarkus (1977) は、セルフ・スキーマ (self schema) に関連する語に対する反応潜在がそうでない語と比べて同じYES反応においても有意に短く、またセルフ・スキーマに関連のある領域は確信を伴った行動予測がなされることを見出している。Rogers, Kuiper, & Kirker (1977) は、自己が極めて豊かな構造を持つため、自己関連づけ処理は意味的な処理に比べて、より明瞭な記憶痕跡を生じさせる精緻な処理であると解釈している。

自己の多次元性を捉えようとする研究の一つとして、長島・藤原・原野・斎藤・堀 (1967) が挙げられる。長島他は因子分析を用い、大学生の自己認知の構造が「向性」、「情緒安定性」、「強靱性」、「誠実性」、「過敏性」、「理知性」の6次元から構成されることを示している。また、林 (1978) は対人認知の構造が基本的に「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましさ」、「力本性」に大別できることを指摘している。これらの知見を踏まえ、堀内 (1998) は自己関連づけ処理や、同じ多次元的な処理であっても自己認知の次元に準拠した方が、意味処理や、他者認知の次元に準拠した場合よりも記憶成績が優れることを明らかにした。

以上のように、自己関連づけ効果の生起に自己の多次元的な認知構造が関わっていることが示されているが、自己のこういった次元が自己関連づけ効果の生起に強く関与するかは明らかにされていない。また、長島他 (1967) で明らかにされた自己認知の構造にもいささか疑問が残る点がある。それは、長島他によって作成された質問項目には実験参加者にとって、自分のどういう側面について尋ねられているのかが分かりにくく、そのため回答しにくい項目が含まれているという点である。例を挙げると「不安定な—安定な」という形容詞対に対する評定の際、これが自己のどのような状態の安定／不安定を尋ねようとしているのかが不明確であり、長島他の質問項目にはそういった項目が複数存在する。そのため、より具体性を伴う回答のしやすい尺度を用い、個人の特性を測定する必要がある。

そこで本研究では、小塩 (2001) の作成した自己像の不安定性尺度を用いる。この尺度は、数多くある自己の変動性、多面性に関する概念や、それらの概念を操作的に定義する方法の中でも代表的なものであるRosenberg (1965; 小塩 (2001) より引用) の自己安定性尺度 (Self-Concept Stability Scale) を日本語訳したものである。自己の変動性、多面性と抑うつは、徳永・堀内 (2012) において関連があることが指摘されている。この尺度の質問項目には「自分自身についての考えがころころ変わる」、「ある日の自分自身に対する考えが、次の日には全く違うことがある」というように、不安定性についての問いがより具体的で回答しやすい表現となっている。

また、Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) やBuss (1980; 菅原 (1984) より引用) によると、自己には、自己の内面や感情、気分など、他者からは直接観察されない自己の側面に注意を向ける私的自己意識と、自己の服装や他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける公的自己意識という2側面があるとされている。また、この私的自己意識と公的自己意識のどちらを意識させられやすいかは個人差があると考えられている。この点を踏まえて長島他 (1967) で使用された質問項目を見ると、自己の側面に注意を向ける項目はあるが、他者からの視点で見られる自己の側面についての項目は含まれていない。

そのため、本研究では、公的自己意識と私的自己意識の両方を踏まえて作成された菅原 (1984) の自意識尺度を用いる。公的自己意識は渡辺 (2004) において、私的自己意識は高野・丹野 (2009) において、抑うつとの関連が明らかにされている。菅原の自意識尺度には、「自分がどんな人間か自覚しよう」と努めている」や「その時々気持の動きを自分自身でつかんでいたい」といった私的自己意識の項目だけでなく、「人の目に映る自分の姿に心を配る」や「初対面の人に、自分の印象を悪く

しないように気づかう」といった公的自己意識の項目も含まれている。この尺度を用いることで他者から見た自己という側面について測定しつつ、自意識の強さの違いが自己関連づけ効果の現れ方に影響を及ぼすかを明らかにする。

さらに、他者からの視点と関連するものとして、他者からの評価や、その予測の帰結としてのシャイネスがある。Ferguson, Rule, & Carlson (1983) は、自己関連づけ処理と、人物の評価に関わる評価的次元に準拠した処理の再生・再認成績を比較した結果、二つの処理課題は同程度の記憶成績を示すことを見出し、自己関連づけ処理には評価的次元に準拠した処理が介在している可能性を示している。Leary (1986; 菅原 (1998) より引用) によると「他者から評価されたり、あるいは評価されることを予測したりすることによって生じる対人不安と対人行動の抑制によって特徴づけられる感情—行動症候群」と定義されるシャイネスは、この定義に基づくならば、評価的次元との関わりがあると想定することができ、その上、シャイネスは抑うつとの関連が明らかにされている(三輪・三浦・上里, 1999)。そのため、本研究では、シャイネスが自己関連づけ効果へ及ぼす影響についても検討する。

鈴木・山口・根建 (1997) によると、最近の行動論的アセスメントは、認知的な要素を取り入れる動向にあり、人間を認知・感情・行動という側面から包括的に捉えるべきだという主張がなされているが、シャイネスのアセスメント法のうちで広く利用されてきた自己報告式の尺度の代表的なものを見てみると、認知的な側面を含めて測定できるものはなかったと論じている。シャイネスを測定する上では、感情という情動覚醒や身体・生理的徴候だけでは不十分であり、自分の行動や他者からの評価に対する不合理な思考などを気にするという認知も取り扱えることが望ましいと思われる。そこで、鈴木他が作成した早稲田シャイネス尺度 (Waseda Shyness Scale) を用いる。この尺度は「積極性」、「リラックス」、「過敏さ」、「自信のなさ」、「不合理な思考」といった因子で構成されており、それぞれ「私は人と広くつきあう方だ」、「対人的な場面で緊張し、心臓がドキドキすることが多い」、「人と会話していて神経過敏になることがよくある」、「私には人に好かれるような魅力がほとんどない」、「私は会う人すべてから好かれ、受け入れられなければならない」といった質問項目で、感情と認知の両側面からシャイネスを測定するものである。

以上のように、本研究では自己関連づけ効果に自己像の不安定性、自意識、シャイネスという個人特性が関連しているのかを明らかにすることを目的とする。

自己像が不安定であるという状態は、日によって自分の評価が変わるなど内的一貫性に乏しく、以前や現在の自分の違いに気づくということである。そのため、以前や現在の自己について比較したり、気にしたりすることが多いと考えられ、自己像の不安定性の傾向が高い人ほど自己関連づけ効果が起こりやすいのではないかと予測される。また、自意識は文字通り自己に対する意識のことであるため、自意識が高い人ほど、自分の意識に入ってくる数多くの情報の中でも自己に関する情報に意識を向けやすいと考えられる。そのため、自意識が高い人ほど、自己関連づけ効果が起こりやすいと予測される。さらに、シャイネスも、その傾向が高い人ほど他者から評価されることを気にするため、自分の言動に注意を払い、自己に関する情報に意識を向けやすいことから、シャイネスが高い人ほど自己関連づけ効果が起こりやすいと考えられる。

本研究によって、抑うつと関連があるとされるこれらの個人特性が自己関連づけ効果に与える影響が明らかになれば、記憶を媒介とした抑うつの理解に貢献すると考えられる。

方 法

実験計画

個人特性を独立変数、自己関連づけ効果を従属変数とした1要因参加者間計画であった。個人特性

は「自意識」, 「シャイネス」, 「自己像の不安定性」であった。なお, 自己関連づけ効果は, 後述する「物理処理条件」, 「意味処理条件」, 「自己関連づけ処理条件」のうち, 後者の2条件における再生数の差分で得点化した。

実験参加者

実験参加者は岐阜大学生102名 (男性36名, 女性66名) であった。そのうち, 実験においてプログラム
の動作に不備が生じた者2名, 質問紙の回答に不備があった者2名, 自己関連づけ処理条件以外の処理
条件でも自己に関連づけて考えたと受け取れる内容を内省報告記入用紙に記述した者11名のデータを分
析から除外した。そのため, 分析対象となった実験参加者は87名 (男性30名, 女性57名) であった。

材料

刺激語 使用する刺激語は, 青木 (1971) の性格特性語から, 社会的に望ましい性格特性を表わす
語48語, 社会的に望ましくない性格特性を表わす語48語の計96語を選んだ。刺激語の選出に際して,
できるだけ聞き覚えがあるであろう分かりやすい表現を選び, 特定の性格領域に偏らないようにした。
また, 日本語の場合, 形容動詞に含まれている名詞部分だけで性格特性語とみなせるため, 形容動詞
の末尾にある「な」を取り除いた (例えば, 「快活な」であれば「快活」)。これらを基に, 社会的に
望ましい性格特性語16語と社会的に望ましくない性格特性語16語からなるリストを三つ作成した
(Table 1)。それぞれのリストは, 語の望ましさをの評定中央値の合計が大体同じになるようにした。
三つのリストを, 自己関連づけ処理条件, 意味処理条件, 物理処理条件に均等に割り当てられるよう
にプログラムを三つ作成した。その三つのプログラムを実験参加者間でカウンターバランスした。

なお, 刺激語の提示にはSuper Labを用いた。刺激語は, コンピュータ画面の中央に位置するよう
に設定した。フォントはMS Pゴシックで, フォントサイズは100ポイントであった。

挿入課題 挿入課題としてストループ課題を用いた。フォントはMSゴシック, フォントサイズは
18ポイントで表に114個, 裏に116個の色名を書いたA4の用紙を用意した。これは声に出して表裏を
読み終えるのに, 約2分~3分を要するように作成した。

質問紙 質問紙は, 調査の目的及び回答者の基本情報を求める項目が書かれた表紙, 自意識尺度,
シャイネス尺度, 自己像の不安定性尺度から構成された。

フェイスシート 表紙には, 調査の目的が書かれていた。その中に, 調査の結果は統計的に処理さ
れるため個人が特定されることがないこと, 他の目的には使用しないこと, 回答は全ての項目につき
一つであることを明示した。また, 学部, 学年, 性別, 年齢を尋ねる欄を設けた。

自意識尺度 自意識の程度を測定するために, 菅原 (1984) によって作成された自意識尺度 (計21
項目) を用いた。“以下の項目は, あなたにどの程度当てはまるものでしょうか。「7. 非常に当ては
まる」から「1. 全く当てはまらない」のうち最も近いもの一つに○をつけてください。”という教示
文を提示し, 7件法で回答を求めた。

シャイネス尺度 シャイネスの程度を測定するために, 鈴木・山口・根建 (1997) によって作成さ
れた早稲田シャイネス尺度 (計25項目) を用いた。“以下の項目はあなたにどの程度当てはまるもの
でしょうか。「1. はい」から「5. いいえ」のうち最も近いもの一つに○をつけてください。”という
教示文を提示し, 5件法で回答を求めた。

自己像の不安定性に関する質問紙 自己像の不安定性の程度を測定するために, 小塩 (2001) によ
って作成された自己像の不安定性尺度 (計5項目) を用いた。“あなたのあなた自身への評価の仕方
に関する質問です。それぞれの質問が「自分にどれだけ当てはまるか」を考えて, 1から5の数字のい
ずれかに一つ○をつけてください。”という教示文を提示し, 「1. 当てはまらない」から「5. 当ては
まる」の5件法で回答を求めた。

内省報告 内省報告記入用紙への記入を求めた目的は、自己関連づけ効果についてすでに知っている者や、偶発学習中に記銘意図があった者を分析から除外するためであった。そのため、「実験中にどんなことを考えていましたか?」、「実験中、画面に出てきた単語を覚えようとしていましたか?」、「実験等で何かお気づきのことがありましたら、お書きください。」といった文を記載し、実験参加者に回答を求めた。

Table 1 青木 (1972) から選出した性格特性語96語

| List1 | 評定値 | List2 | 評定値 | List3 | 評定値 |
|---------|-----|---------|-----|-----------|-----|
| 快活 | 2.6 | 陽気 | 3.2 | 献身的 | 2.5 |
| 円満 | 2.6 | 寛大 | 2.9 | なごやか | 2.9 |
| 温厚 | 3 | 親身 | 3 | 情け深い | 3 |
| 博愛的 | 3.1 | 世話好き | 3.4 | 優しい | 3.4 |
| 望 沈着 | 2.7 | 謙虚 | 2.8 | 安定した | 2.9 |
| ま 協調的 | 2.9 | 冷静 | 2.9 | 穏健 | 3.2 |
| し 動じない | 3.4 | 几帳面 | 2.8 | 綿密 | 2.9 |
| い 手堅い | 3 | 注意深い | 3.1 | 徹底する | 3.1 |
| 語 慎重 | 3.2 | 地道 | 3.2 | 念入り | 3.3 |
| 入念 | 3.4 | 仕事熱心 | 2.5 | 勤勉 | 2.6 |
| 積極的 | 2.6 | 辛抱強い | 2.7 | がまん強い | 2.7 |
| 活動的 | 2.8 | 不言実行 | 2.8 | こまめ | 3.5 |
| 勇敢 | 3 | 口堅い | 3.1 | 柔軟 | 3.3 |
| 純真 | 3.1 | 律儀 | 3.2 | 厳格 | 3.4 |
| 率直 | 2.9 | 折り目正しい | 3 | 慎み深い | 3.1 |
| 礼儀正しい | 2.5 | 正直 | 2.6 | まじめ | 2.7 |
| 憂うつ | 6.9 | 悲観的 | 6.8 | くよくよする | 6.8 |
| 人ざらい | 6.8 | 気むずかしい | 6.6 | うちとけない | 6.7 |
| 情け知らず | 7.2 | 勝手 | 7 | 冷淡 | 7.2 |
| わがまま | 6.9 | 辛辣 | 6.7 | ひとりよがり | 6.8 |
| 望 口汚い | 7.1 | けんか好き | 7.2 | かんしゃくもち | 7.1 |
| ま 衝動的 | 7 | しつと深い | 7.1 | すねる | 6.8 |
| し 激しやすい | 6.8 | 気まぐれ | 7 | ゆきあたりばったり | 7.1 |
| く 不注意 | 7.2 | 軽卒 | 6.9 | 気まま | 6.8 |
| な 軽薄 | 7 | あきっぱい | 7 | 無気力 | 7.2 |
| い 計画倒れ | 6.9 | 意気地なし | 7.1 | 消極的 | 6.7 |
| 語 うろたえる | 7 | 泣き寝入りする | 6.8 | 取り乱す | 6.9 |
| 軟弱 | 6.8 | ろうばいする | 6.7 | 臆病 | 6.7 |
| 引込み思案 | 6.6 | 疑い深い | 7.2 | 押しつけがましい | 7 |
| 意固地 | 7.1 | 高飛車 | 6.9 | 執念深い | 6.7 |
| 高圧的 | 6.8 | おしゃべり | 6.5 | 口やかましい | 6.7 |
| 気どる | 6.8 | そらとぼける | 6.9 | 大げさ | 6.6 |

手続き

本実験は、自己関連づけ効果を測定する実験、個人特性を問う質問紙調査、内省報告とデブリーフィングから構成された。

自己関連づけ効果を測定する実験 偶発学習の手続きを用いて個別に実験を行った。実験参加者は、コンピュータ画面上に提示された刺激語とそれに関する質問に対して、キーボードのFキーまたはJキーを押すことで「はい」あるいは「いいえ」の判断を行った。自己関連づけ処理条件では「記銘語が自分に当てはまるか」、意味処理条件では「刺激語が社会的に望ましいか」、物理処理条件では「刺激語が3文字以上か」を判断した。Figure 1は自己関連づけ処理条件における提示画面の例である。3条件の各試行をランダムに提示し、計96試行を行った。試行と試行の間には、毎回空白を1500ms挟んだ。実験参加者は教示を受けた後、練習試行を3回行った。練習試行後、本試行を実施した。Figure 2に試行の流れを示す。

その後、挿入課題としてストループ課題を行った。実験参加者は教示を受けた後、A4用紙の表裏に書かれた色名を読み上げた。実験者はその読み上げにかかった時間を計測した。

実験の最後に、実験参加者は偶発学習で判断した刺激語を5分間でできるだけ多く想起し、所定の用紙に回答した。

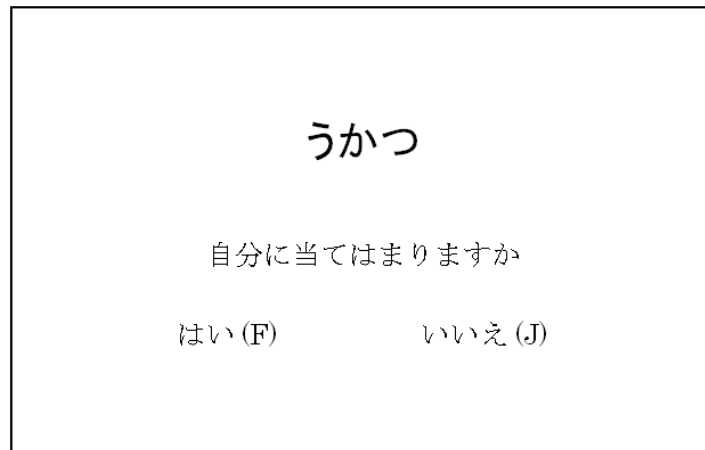


Figure 1. 自己関連づけ処理条件の例

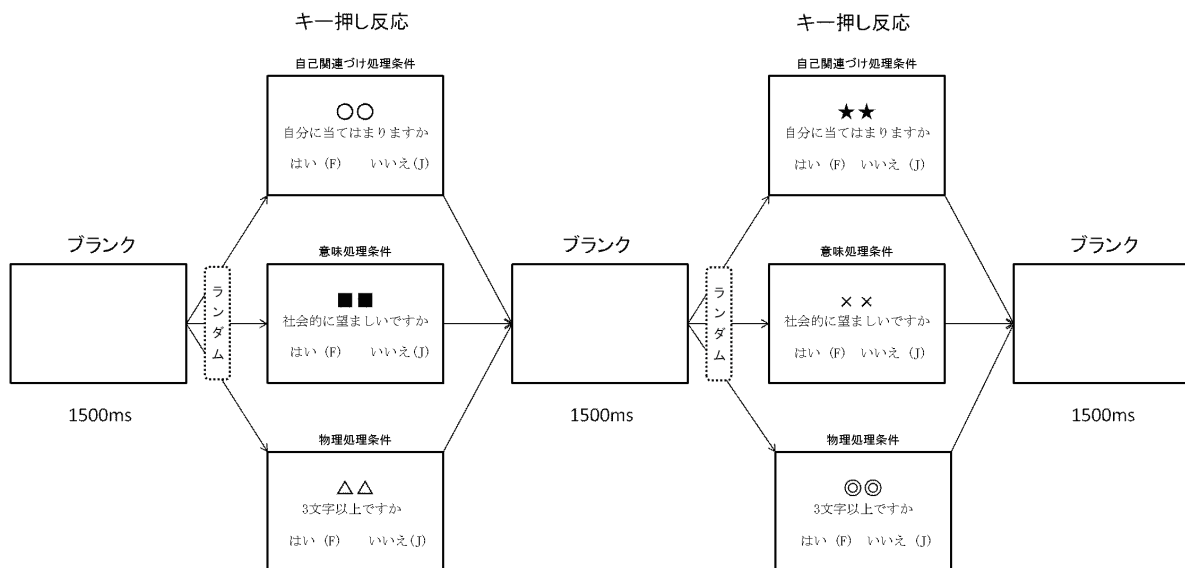


Figure 2. 試行の流れ

質問紙調査 自己関連づけ効果の実験終了後、実験参加者は質問紙を配布され、教示を受けた後、質問紙に回答した。

内省報告 最後に内省報告記入用紙を実験参加者に配布した。実験参加者は、実験を行っている最中に考えたこと、思ったことについて回答した。

結 果

自己関連づけ効果

実験参加者が再生した刺激語の数を再生数とした。誤った回答、すなわち再生語のうち刺激語に含まれていなかった語や練習試行で本実験の前に提示された語、明らかに異なる語（「引込み思案」を「引きこもり」と解答するなど）は再生数に含めなかった。しかし、おおよそ同じ意味の語（「冷淡」を「冷酷」、「世話好き」を「世話焼き」と解答するなど）は再生数に含めた。

各処理条件の平均値と標準偏差をTable 2に示す。1要因3水準の分散分析を行ったところ、有意な差が認められた ($F(2, 86)=74.43, p<.001, \hat{\omega}_p^2=.63$)。Ryan法による多重比較の結果、自己関連づけ処理条件と物理処理条件との間に有意な差が認められた ($p<.001$)。また、意味処理条件と物理処理条件との間にも有意な差が認められた ($p<.001$)。しかし、自己関連づけ処理条件と意味処理条件との間に有意な差は認められなかった。

各尺度の単回帰分析

次に、シャイネス尺度、自己像の不安定性尺度の得点を尺度ごとに合計し、各実験参加者の特性の得点を算出した。自己意識尺度については、公的自己意識得点、私的自己意識得点の二つに分けて算出した。その後、各特性の得点を独立変数、自己関連づけ得点を従属変数とする回帰分析を行った。自己関連づけ得点は、自己関連づけ処理条件の再生数から、意味処理条件の再生数を引いた値とした。

公的自己意識と自己関連づけ得点の回帰分析の結果、説明変数の標準回帰係数は有意でなかった ($\beta=-0.007, p=.83$)。決定係数は $R^2=.00054$ であり、有意でなかった ($F(1, 85)=0.04, ns$)。次に、私的自己意識と自己関連づけ得点の回帰分析の結果、説明変数の標準回帰係数は有意でなかった ($\beta=-0.03, p=.40$)。決定係数は $R^2=.00082$ であり、有意でなかった ($F(1, 85)=0.70, ns$)。シャイネスと自己関連づけ得点の回帰分析の結果、説明変数の標準回帰係数は有意でなかった ($\beta=0.01, p=.46$)。決定係数は $R^2=.00063$ であり、有意でなかった ($F(1, 85)=0.53, ns$)。最後に、自己像の不安定性と自己関連づけ得点の回帰分析の結果、説明変数の標準回帰係数は有意であった ($\beta=0.11, p=.04$)。決定係数は $R^2=.04$ であり、有意であった ($F(1, 85)=4.02, p<.05$)。

Table 2. 各処理条件で再生された語の平均値と標準偏差

| | 平均値 | 標準偏差 |
|------------|------|------|
| 自己関連づけ処理条件 | 4.39 | 2.31 |
| 意味処理条件 | 4.12 | 2.18 |
| 物理処理条件 | 1.43 | 1.13 |

考 察

本研究の目的は、自己関連づけ効果に自意識、シャイネス、自己像の不安定性という個人特性が関連しているのかを明らかにすることであった。実験の結果、自己関連づけ効果は認められなかった。このようになった理由として、刺激語を提示する時に、処理条件ごとにブロック提示せず、ランダムに提示したことが原因であると考えられる。

本研究では、堀内 (1998) 同様、自己関連づけ処理、意味処理、物理処理の3条件を被験者内要因として実験参加者に課したが、提示形式の点で異なっていた。堀内 (1998) はブロック提示を採用していたが、本研究では、参加者が物理処理条件で刺激語をろくに見ることもせずに判断することを危惧し、毎回次に来る条件が変わるようランダム提示を採用した。しかし、このランダム提示のせいで、前に見た処理条件の判断方法が頭から離れず、処理条件の差別化ができなかったのではないかと考えられる。分析対象から除外した15名のうち11名は、自省報告記入用紙に「自己関連づけ処理条件以外の処理条件でも、自己に関連づけて判断した」と受け取れる内容を記述していた。このような処理の混乱は、分析対象となった87名にも多かれ少なかれ起きていたのかもしれない。そのため、自己関連づけ処理条件と意味処理条件の記憶成績に違いが現れず、自己関連づけ効果の生起が認められなかったと考えられる。今後は刺激語を提示する際、ランダム提示するのではなく、ブロック提示することが必要であろう。

このように本研究では、明瞭な自己関連づけ効果を検出できていないという制約はあるものの、以下に自己関連づけ効果と各尺度との関連について考察する。

自意識尺度は、自己関連づけ効果との関連について、公的自己意識と私的自己意識に分けて分析を行った。その結果、公的自己意識、私的自己意識ともに自己関連づけ効果との関連は認められなかった。したがって、自意識が高い人ほど自己関連づけ効果が起こりやすいであろうという仮説は支持されなかった。統計学的な観点からすれば、自意識が自己関連づけ効果に与える影響については明確な結論を提出することはできない。

次に、シャイネスと自己関連づけ効果との関連を分析した結果、関連は認められなかった。そのため、シャイネスが高い人ほど自己関連づけ効果が起こりやすいであろうという仮説は支持されなかった。したがって、自意識と自己関連づけ効果の関係同様、シャイネスと自己関連づけ効果の関連について結論づけることはできない。

最後に、自己像の不安定性と自己関連づけ効果の関連を分析した結果、関連が認められた。そのため、自己像の不安定性の傾向が高い人ほど自己関連づけ効果が起こりやすいであろうという仮説は支持された。これは、自己像が不安定であるために、安定している人よりも、多くの次元に準拠した処理がされたのではないかと考えられる。

自己像の不安定性と似たものに、自己概念の明確性尺度 (徳永・堀内, 2012) がある。徳永・堀内は、自己概念を再吟味したり、自分を真剣に模索したりしていれば、その最中はおのずと自己概念の明確性は低くなることが予想されることや、そのような一時的低下を経て、新たな自己概念が形成されるという考えを提起している。自己像の不安定性の傾向が高い人は、このように自己概念を吟味している中で、様々な次元を自己の中に形成しており、自己像が安定している人よりも多くの次元で処理を行う傾向があり、その結果、精緻な処理が行われ、明瞭な記憶痕跡が残されやすいために、自己関連づけ効果と関連が見られたのではないかと考えられる。

本研究では、自己関連づけ効果と自意識、シャイネス、自己像の不安定性といった個人特性との関連を検討することが目的であったが、そもそも自己関連づけ効果の生起が認められなかった。これは前述したように、刺激語を提示する時に条件をブロック提示ではなくランダム提示したことが理由として考えられる。したがって、自己関連づけ効果という現象を検出するには、処理条件を実験参加者

へ提示する際にランダムに提示するのではなく、処理条件ごとにブロック提示をしなくてはならないという点に注意しなければならないといえよう。

しかし、本研究では自己像の不安定性と自己関連づけ効果との関連性が示唆された。この自己像の不安定性は、自己愛や自尊感情との関連が先行研究で明らかにされている。例えば、Westen (1990) は自己愛人格の自己像が安定していないことを指摘している。また小塩 (2001) は、自己愛傾向が自己像の不安定性を媒介して自尊感情に影響を与えることを明らかにしている。このことから、自己像の不安定性と関連のあるこれらの自己愛傾向と自尊感情という個人特性も自己関連づけ効果と関連がある可能性が考えられる。

このように、自己像の不安定性が自己関連づけ効果に影響を与えている可能性を示した点で、本研究は、記憶を媒介とした抑うつ理解に向けた知見を提供できたといえよう。

引用文献

- 青木孝悦 (1971). 性格表現用語の心理-辞典的研究—455語の選択, 分類および望ましさの評定— 心理学研究, 42, 1-13.
- Beck, A. (1976). *Cognitive therapy and emotional disorders*. Madison, Connecticut: International Universities Press. (大野 裕 (監訳) (1990). 認知療法—精神療法の新しい発展— 岩崎学術出版社)
- Buss, A. H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco, California: Freeman.
- Cull, W. M., Shaughnessy, J. J., & Zechmeister, E. B. (1996). Expanding understanding of the expanding-pattern-of-retrieval mnemonic: Toward confidence in applicability. *Journal of Experimental Psychology: Applied*, 2, 365-378.
- Cunningham, S. J., Van den Bos, M. B., Gill, L., & Turk, D. J. (2013). Survival of the selfish: Contrasting self-reference and survival-based encoding. *Consciousness and Cognition*, 22, 237-244.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Ferguson, T. J., Rule, B. G., & Carlson, D. (1983). Memory for personally relevant information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 251-261.
- 林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 233-247.
- 堀内 孝 (1995). 自己関連づけ効果の解釈をめぐる問題 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 42, 157-170.
- 堀内 孝 (1996). 自己の性格特性に関する判断—自己認知の次元に準拠した処理— 心理学研究, 67, 390-395.
- 堀内 孝 (1998). 自己認知の多次元性と自己関連づけ効果 心理学研究, 68, 484-490.
- 堀内 孝 (2008). エピソード記憶と自己—自己関連づけ効果をめぐる問題— 心理学評論, 51, 43-58.
- Leary, M. R. (1986). Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York: Plenum Press, pp.27-38.
- Markus, H. (1977). Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 63-78.
- Mathews, A., & MacLeod, C. (1994). Cognitive approaches to emotion and emotional disorder. *Annual Review of Psychology*, 45, 25-50.
- 三輪雅子・三浦正江・上里一郎 (1999). 大学生のシャイネスと信頼感, および精神的健康の関連性の検討 ヒューマンサイエンスリサーチ (早稲田大学大学院人間科学研究科), 8, 121-137.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀 洋道 (1967). 自我と適応の関係についての研究 (2) —Self-Differentialの作製— 東京教育大学紀要, 13, 59-83.

- 中尾 敬・宮谷真人 (2003). 自己関連付け効果に感情価処理が介在するか 広島大学大学院教育学研究科紀要, 3, 291-296.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. (1977). Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 677-688.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 菅原健介 (1998). シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究, 7, 22-32.
- 鈴木裕子・山口 創・根建金男 (1997). シャイネス尺度 (Waseda Shyness Scale) の作成とその信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, 30, 245-254.
- 高野慶輔・丹野義彦 (2009). 抑うつと私的自己意識の2側面に関する縦断的研究 パーソナリティ研究, 17, 261-269.
- 徳永侑子・堀内 孝 (2012). 邦訳版自己概念の明確性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 20, 193-203.
- 渡辺克徳 (2004). 公的自己意識と抑うつの関係について—抑うつに他者の存在は重要か?— 臨床教育心理学研究 (関西学院大学), 30, 33-37.
- Westen, D. (1990). The relations among narcissism, egocentrism, self-concept, and self-esteem: Experimental, clinical, and theoretical considerations. *Psychoanalysis and Contemporary Thought: A Quarterly of Integrative and Interdisciplinary Studies*, 13, 183-239.